

---

# しりとり。

由加 しい

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

しりとり。

### 【Nコード】

N7317Z

### 【作者名】

由加 しい

### 【あらすじ】

誰かの背中を自分が追い、そんな自分の背中を誰かが追う。まるでしりとりのように終わりが来るまで続いていく。人生や青春はたぶんそういうもの。

## 開始（前書き）

初投稿作品です。

何かとよろしくお願いします。

## 開始

桜の花が散り、木々に緑が目立ち始めた5月。暦上では「立夏」と呼ばれ、夏の始まりとされているが、まだ肌寒い。

また、この時期の全国のほとんどの学校は新入生が周りの環境に慣れ、新入生勧誘のシーズンも終わり落ち着きを取り戻す。私立桐竹高等学校もそんな学校のひとつだ。

桐竹高校は、都内にあるなかなかの進学率を誇る進学校である。校名が人形浄瑠璃の名家である「桐竹家」に由来しているからなのか、生徒の自主性を重んじる校風からなのか、部活や同好会特に文化系の部活や同好会が多い。吹奏楽部からオカルト研究同好会まで網羅している。

それゆえ部活の新入生勧誘は、もうお祭り騒ぎである。そんな賑やかな時期が過ぎ、静かになった廊下を部室に向かって歩く祇条梨斗（ていりょうりくと）の足取りは重かった。

なぜなら、職員室で担任の池代英樹（いけしろひでき） 通称「イケシ」 に説教をされていたからだ。

池代は学校内で厳しいと有名な中年の大柄な先生である。担当教科は数学、テニス部の顧問をしている。その大きな体から放たれる数々の言葉や、厳しさは生徒たちを恐れさせてきた。

そんな先生に怒られて気分がいい人は、一部を除いていない。自ら怒られるような人は尚更だ。

池代の説教の内容は、  
「俺は魔法を使える。白魔法、黒魔法、時空魔法だ。わかるな。平常点による救済、退学処分、停学処分。お前は成績も素行も悪くはないんだがな。黒魔法と時空魔法は使わせないでくれよ。そもそも

……」  
という感じで、30分も続いた。

上手い事を言おうとしているみたいだが、聞いていてとても恥ず

かしい。

そもそも説教されている原因は、たまたま授業中寝てしまい、たまたま池代に見つかり、たまたま池代の鼻屑にしている野球チームが6連敗中で機嫌がよくなかったからだ。

運が悪い。

普段から運が良いわけじゃないが、今日は一段と運が悪い。

「はあ……。最悪」

嘆息を漏らしながら歩くこと1分。梨斗は目的の部室に到着した。文化系部室<sup>3</sup>。

梨斗の所属する部活は新設で、部員が一年生5人ながらも、どのクラブも欲しがる三階建ての文化系部室棟の一階のこの部屋を、図々しく部室として活動している。

扉を開き、中に入ると他の部員の4人が、

「大変だったな」

「ドンマイ。早く座りなよ」

「イケシとの楽しいお説教タイムはどうだった？」

「ほら、始めようよ」

と四者四様の言葉をかけてきた。

「そう急かすなって。あとお前は励ましの言葉じゃない！ 楽しくなんかないよ」

梨斗が一人の少女の言葉を指摘をすると、ごめんごめん、とその女の子は頭をさすりながら言った。

「からかうなよな。もう」

鞆を置き、梨斗はソファに力なくへたり込んだ。

そして頬を二度叩き、気合を入れる。

「さあ、やるっか」

大きく間を開けて一言。

「しりとり」

## 紹介

しりとりという言葉遊びについては、もはや詳しい説明は必要なくらい全国に浸透しているだろう。

公式に統一されたルールといったものはなく、様々なルールが存在している。

基本的なルールは、前の人が出た単語の最後の文字から始まる単語を言っていき、最後に「ん」が付く単語を言ったら負け。ただそれだけである。

桐竹高校しりとり部は、野球部が野球を、歴史部が歴史研究を目的として活動しているように、しりとりをすることを目的として活動している。

\*\*\*

「りんご」

しりとり、と言った梨斗に続けて少女が出た。

彼女の名前は水沢瑠芙。みずさわるつぷ 梨斗の隣に住んでいて、小さいころからの付き合い。いわゆる幼馴染というやつだ。

明るい茶色の髪は肩まで伸びており、毛先は肩の上にふんわりと乗っている。一点の曇りもない白い肌、しっとり潤う黒い瞳、ふつくらとした桃色の唇の揃っているその顔は、まさに「芙蓉の顔」かんぼせと形容されるにしかるべきものである。

そんな容姿と明るく人当たりのいい性格から、校内での人気は男女どちらからも高い。

続けて、

「御所桜」

と言った少年は、雨竜麦。うりゅうむぎ

耳にかかる程度に伸びた黒い髪と、黒縁メガネから漂う知的な才

ーラは本人の内面を的確に表している。

博識だがちよつと抜けているところもあり、やると決めたことへの行動力は目を見張るものがある。この文化系部室3を確保したのも妻である。

御所桜という捻くれた答えに続いて、

「ラッパ」

と可愛らしい声がした。

その声の持ち主は、芥菜台<sup>からしなつてな</sup>。

黒く長い髪は乱れなく真っすぐで、小柄で華奢な体型には小動物のような可愛らしさがある。本人としては、その小柄な体型がコンプレックスのようだ。

温厚篤実で他人思い、いつでもニコニコしているしりとり部の癒し系である。

そして、快活な声で恥じらいもなく、

「パンツ」

と叫んだ彼女は、月島莉香<sup>つきしまりか</sup>。

イケシの説教から帰ってき梨斗に、楽しかった、と声をかけたのは莉香である。

赤みのかかった茶色い長い髪は、ゆったりと後ろでくくられている。

いまどきの女子高生らしい短いスカートからは、見事な脚線美の足がすらつと伸びていている。身長の高さとスタイルから、外見はモデルのようである。

しかしそれは黙っていればの話で、喋り出すと止まらない、とにかくテンション高め、死語を多用するといった具合。ちよつと残念だが、しりとり部のトラブルメーカーもといムードメーカーである。

「臆面もなく女子が『パンツ』とか言うなよな。積み木」

「いつも通りでいいんじゃない？ 桔梗」

「もう少し恥じらがあった方が良さと思うけどな。ウド」

「なんか途中から植物縛りだよね。じゃあドクダミ」

「え？ なになに。縛りやってんの？ ちょっとタンマ。うっん…。  
…。ミンチ！」

そんな風に放課後を過ごしているうちに、あっという間に5時20分。部活の活動終了時間だ。

結局しりとりのはきは付かなかった。

この部活のしりとりでは、最初に脱落した人には基本的に罰ゲームがあり、5人みんなが負けまいと奮闘するので、時間内に決着がつくことはあまりない。

5人でぞろぞろと部室を出て、生徒玄関へと歩く。まだ、外は明るく野球部がグラウンドで汗を流しながらノック練習をしている。

学校から最寄りの駅までは、特に上り下りのない道を歩いて5分。あの先生がどうだった、あの子あるいはあいつがどうだったなんて他愛のない話をしているうちに到着する距離だ。

ちなみに今日の話題は、梨斗の説教の内容だ。

駅に到着すると、5人は帰る方向ごとに分かれる。梨斗と瑠芙は徒歩、麦は電車で上り方向、台と莉香は下り方向。

お互いに、じゃあね、と言い合って別れた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7317z/>

---

しりとり。

2012年1月2日02時48分発行